

# 白山チブリ尾根及び市ノ瀬周辺の厳冬期の鳥類

上馬 康生 石川県白山自然保護センター

## BIRD IN THE SEVERE WINTER OF CHIBURI RIDGE AND ICHINOSE IN MT. HAKUSAN

Yasuo UEUMA, *Hakusan Nature Conservation Center, Ishikawa*

### はじめに

白山の冬期の鳥類調査は、悪天候と深雪、雪崩などの危険性をともなうことから、今までまともに行われたことはない。とりわけ高標高地の1~2月の厳冬期の調査報告は全くない。

著者は1988年2月に白峰村市ノ瀬に入山する機会を得て、また天候にも恵まれ、鳥類の記録をとることができたので報告する。なお白山チブリ尾根の鳥類に関しては、繁殖期(上馬, 1985)及び秋期(上馬, 1987)の鳥類群集について既に報告してある。

調査に際し、宿泊等お世話になった永井竹男氏、チブリ尾根の現地を案内していただいた尾田好雄氏に感謝の意を表します。

### 調査地及び調査方法

調査は2月11日から14日に行った。白峰村の緑の村(風嵐)を出発し、市ノ瀬で2泊して、チブリ尾根および六万山南斜面で調査した。調査方法はスキーをはいて移動しながらの線センサス法で片側それぞれ概ね50m以内に観察できた個体を、高度計および2万5千分の一の地形図を使用して位置を確認しながら記録した。調査地を環境等から3つに分けたが、A区は出発点の緑の村(標高510m)から市ノ瀬(標高830m)までの手取川上流域の川に沿う車道および川原である。植生はミズナラ林が主で、スギ植林地が一部にみられ、距離は10.6kmであった。B区は市ノ瀬から別当出合へ向う車道沿いの3.8kmで、ブナ林を主としスギ植林地が一部にみられ、最高到達標高は1100mである。C区は市ノ瀬からチブリ尾根の標高1380mまで上り、引き返してくるルートで、川原及びブナ林の距離6.4kmのところである。

調査開始日の前日までかなり激しい降雪が続き、白峰村白峰で2月7日から10日までの4日間の総降雪量は1m50cmを記録した。また積雪は2月11日夕方現在で、市ノ瀬で2m50cmあり、車道は全区間積雪があり、前年の12月から冬期通行止めとなっていた。また期間中毎日新たに積雪があり、市ノ瀬では各々5~30cmとなった。なお調査地域は、冬期間は一時的なごく少数の入山者を除いて無人となる。

### 調査結果及び考察

出現した鳥類の場所を地図上に記入すると図のようになる。図のA区で、白丸の数字は2月11日

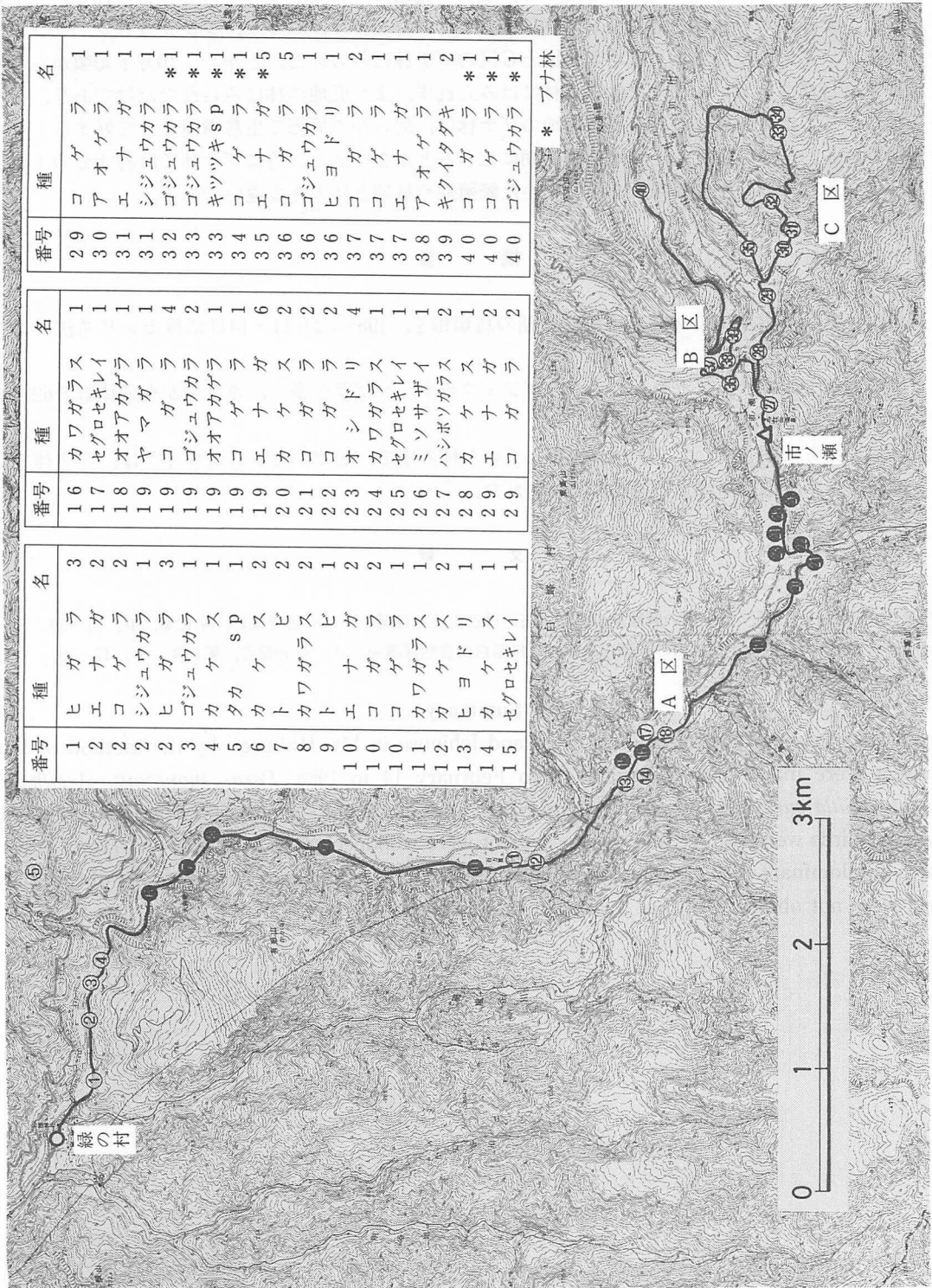
の、黒丸の数字は2月14日の調査結果を示している。これを各調査区ごとに集計すると表のようになる。個体数は確認できた最小の数値で示してある。期間中に記録され種の確認できた鳥類は、センサス範囲の周辺を含めて18種であった。A区では、コガラ、エナガ、ヒガラ、カケス、カワガラス、オシドリなどが数多く出現している。いわゆるカラ類（シジュウカラ科、ゴジュウカラ科、エナガ科）、キツツキ類と河川環境にすむ鳥（カワガラス、オシドリ、セグロセキレイ）で82%を占めている。B区ではコガラ、ゴジュウカラが比較的多く、カラ類とキツツキ類で大部分を占めている。またC区ではエナガが多く出現し、ここでもカケスの1羽を除くと他は全てカラ類とキツツキ類である。B区、C区のブナ林に限ると、出現したのはエナガ、ゴジュウカラ、コゲラ、コガラ、アオゲラのみである。全体では、コガラ、エナガ、ゴジュウカラ、コゲラが、全ての調査区でみられ、また個体数も上位を占めている。そしてカラ類が全個体数の62%と過半数を占め、次いでキツツキ類が12%となっている。その他では、前記の河川環境にすむ鳥類が12%となっている。

あくまでも1回だけの調査結果であるので、これが厳冬期の鳥類相を代表するものとは言いきれないが、今までに報告した繁殖期及び秋期の鳥類と比較してみる。まず全体の構成種でいえることは、カラ類とキツツキ類が多いことと、秋期にはかなりの割合を占めていたツグミ、アトリ等の冬鳥が全くみられないのが特徴である。次に前報（上馬, 1987）で述べたように、秋期を通しての優占種であったホオジロ、ウグイスは、冬が近づくに従い個体数は減少し、やがてみられなくなる傾向があったが、この季節もみられなかった。これら2種の生息環境である草原や低木の繁みは、調査地域では積

表 チブリ尾根及び市ノ瀬周辺の鳥類集計結果

調 査 場 所	A 区		B 区	C 区	全 区		
	調 査 年 月 日 刻 1988. 2. 11 10:10 ~16:35 調 査 距 離 10.6km 天 気 晴のち曇	1988. 2. 14 9:00 ~13:05 10.6km 晴	1988. 2. 13 8:15 ~11:35 3.8km 晴のち雪	1988. 2. 12 8:20 ~16:00 6.4km 晴のち雪	個 体 数 合 計	相 対 優 占 度	相 対 密 度
コ ガ ラ		10	8	2	20	23.3	0.96
エ ナ ガ	2	8	1	8	17	19.8	0.82
ゴ ジ ュ ウ カ ラ	1	2	3	2	7	8.1	0.34
コ ゲ ラ	2	2	2	2	6	7.0	0.29
ヒ ガ ラ	6				6	7.0	0.29
カ ケ ス	3	4		1	5	5.8	0.24
カ ワ ガ ラ ス	1	4			4	4.7	0.19
オ シ ド リ		4			4	4.7	0.19
ト ビ		3			3	3.5	0.14
セ グ ロ セ キ レ イ	1	2			2	2.3	0.10
シ ジ ュ ウ カ ラ	1			1	2	2.3	0.10
ヒ ヨ ド リ	1		1		2	2.3	0.10
ア オ ゲ ラ			1	1	2	2.3	0.10
キ ク イ タ ダ キ			2		2	2.3	0.10
オ オ ア カ ゲ ラ	1	1			1	1.2	0.05
ミ ソ サ ザ イ		1			1	1.2	0.05
ヤ マ ガ ラ		1			1	1.2	0.05
キ ツ ツ キ s p				1	1	1.2	0.05
ハ シ ボ ソ ガ ラ ス	*				—	—	—
タ カ s p	*				—	—	—
合 計	19	42	18	18	86	100	4.13

相対優占度は百分率(%)、相対密度は1kmあたりの個体数、\*は調査時間外および範囲外の記録を表す。A区の出現種は11日と14日で重複している可能性が高いので、個体数合計にはどちらか多い方をとった。



番号	種	名	番号	種	名	番号	種	名
1	ヒ	ガ	16	カ	ワ	29	コ	ゲ
2	エ	ナ	17	セ	グ	30	ア	オ
2	コ	ケ	18	オ	オ	31	エ	ナ
2	シ	ウ	19	ヤ	マ	31	シ	ウ
3	ヒ	ウ	19	コ	ガ	32	ゴ	ウ
4	コ	ウ	19	ゴ	ウ	33	ゴ	ウ
5	カ	ケ	19	オ	ア	33	キ	ツ
6	タ	カ	19	コ	ゲ	34	コ	ゲ
7	カ	ケ	19	エ	ナ	35	エ	ナ
8	ト	ワ	20	カ	ケ	36	コ	ガ
9	カ	ト	21	コ	ガ	36	ゴ	ウ
10	エ	ナ	22	コ	ガ	36	ヒ	ヨ
10	コ	ガ	22	コ	シ	37	コ	ガ
10	コ	ゲ	24	カ	ワ	37	コ	ゲ
11	コ	ワ	25	セ	グ	37	エ	ナ
12	カ	ケ	26	ミ	ソ	38	ア	オ
13	ヒ	ヨ	27	ハ	ジ	39	キ	ク
14	カ	ケ	28	カ	ケ	40	コ	ガ
15	セ	グ	29	カ	エ	40	コ	ゲ
			29	コ	ウ	40	ゴ	ウ

\* アナ林

図 調査地域及び鳥類確認場所 基図は国土地理院発行2万5千分の1地形図「加賀市ノ瀬」(昭和57年4月30日発行)を使用した。

雪が多いためみられなくなっていることから、晩秋に他地域へ移動していったと考えられる。カラ類の中では、繁殖期から秋期を通してブナ林に優占していたヒガラ、コガラ、シジュウカラ、ゴジュウカラの中で、ゴジュウカラとコガラがB区とC区のブナ林にみられた。しかし、10月下旬頃から著しく減少するヒガラとシジュウカラはブナ林にはみられず、より低地の林にみられただけであり、これらの種にとっては厳冬期における高標高地のブナ林は、何らかの原因で生息環境として好ましくないと予想される。全体の密度も、繁殖期や秋期に比べるとかなり低く、特にブナ林では約4分の1以下となっている点は、豊かな鳥類相を示していた繁殖期や秋期とは大きな違いである。

### 摘 要

- 1) 白山チブリ尾根及び市ノ瀬周辺の厳冬期の鳥類相を、1988年2月11～14日に線センサス法により調査した。
- 2) 調査地域全体では、コガラ、エナガ、ゴジュウカラ、コゲラが多く、カラ類が全個体数の62%、キツツキ類が12%となっている。
- 3) 繁殖期から秋期を通してブナ林に優占していた種の中で、ヒガラとシジュウカラは、ブナ林では確認できず、低標高地への移動が考えられた。

### 文 献

- 上馬康生 (1985) 白山チブリ尾根の繁殖期の鳥類。石川県白山自然保護センター研究報告, 第12集, P. 31-39.  
——— (1987) 白山チブリ尾根の秋期の鳥類。石川県白山自然保護センター研究報告, 第14集, P. 47-55.

### Summary

The surveys on bird of Chiburi ridge and Ichinose in Mt. Hakusan by the method of line transect were made from February 11 to February 14 in 1988. *Parus montanus*, *Aegithalos caudatus*, *Sitta europaea* and *Dendrocopos kizuki* were dominant species. Sixty two percent of all observed birds were titmice and twelve percent were woodpeckers. *Parus ater* and *Parus major*, which are dominant species from early summer to autumn in the *Fagus crenata* forest of the study area, were not observed in that forest but seen in the lower forest.